

小論文（人文学類） 正解・解答例

I

問1

人の言語と動物のコミュニケーション手段は、いずれも、音声や文字、身振りなどの「形式」が外界の事物や概念と対応するという象徴性を持った記号である。しかし、動物のコミュニケーション手段は原則として、現在この場所で起こっているできごとや物理的な実体を伴う事物に対する事象しか言及できない。それに対し、人の言語は、過去や未来のできごと、遠くで起こっているできごと、自己や他者の心情などにも言及ができるという特徴がある。また、人の言語は記号を自由に組み合わせることにより、無限の文を作ることができ、無限の意味を表現することができるが、動物のコミュニケーション手段にはこのような特徴は見られない。(292字)

問2

外国人に対してと同様の方法で、日本語を身につけようとしている赤ちゃんに「ウサギ」を教えるのであれば、日本語で「ウサギは白いふわふわの動物だよ。耳が長くて、目が赤いよ」といったことを言葉で伝えることになる。しかし、この方法は、「白い」「ふわふわ」「動物」などの言葉を赤ちゃんが知らない場合にはまったく役に立たないという問題がある。その他の方法として、たとえば動物園でウサギの実物を見せたり、ウサギが載っている絵本や写真、動画を見せたりして、「ウサギだよ」と教えるという方法が考えられる。この方法は、言葉を使わずに「ウサギ」という語の意味を説明できるので、前述の問題を克服できているという利点がある。したがって、「ウサギ」の持つ特徴を言葉で教えるよりもずっと効果的であると感じられるが、実はそうではない。動物園でピョンピョン跳ね回っているウサギを指差しながら、「ウサギだよ」と言葉をかける場合を考えてみると、この時、「ウサギだよ」が目の前に見えている四本脚の動物であるということは保証されない。跳ね回るといふ動作を指した言葉が「ウサギだよ」かもしれないし、かわいいねという感想を指した言葉かもしれない。このように、実物を含むシーンを見せながら知らない言葉を教えることも、そのシーンのどの部分を切り取ったものがその言葉が指す意味なのかを正しく理解させることには困難があるという問題点がある。(592字)

II

問1

沖縄戦においては米軍が撮影した映像が多く残されているが、それらは勝者の視点、強者の視点から戦争をとらえたものであり、戦争の残虐さや生々しさが正しく伝えられないおそれがある。そこでは、「殺される側」の視点、すなわち火炎放射器で生きたまま焼かれ、手榴弾や艦砲射撃によって身体をふきとばされてしまった日本兵や住民にとって戦争がどのようなものであったのかは示されていない。そうした一面的な見方は、戦争が有する「殺す-殺される」という基本的な関係を不可視のものとし、映像を見る人が知らず知らずのうちに「殺す側」である軍隊の視点のみを内在化させてしまう危険性を有している。(280字)

問 2

米軍が記録した写真や映像を見るだけでなく、沖縄の住民や無名兵士の視点からそれらを見直し、検証することで、撃たれる側、焼かれる側、殺される側、映像に撮られる側の視点から、戦争をとらえ返すことが可能となる。それは軍隊や政府、政治家など、しばしば戦争を押し進めた側から提示される公式の戦争のとらえ方のみならず、戦争によって殺された人々、傷つけられた人々、家族や友人を奪われた人々など一人一人の側から戦争をとらえることで、戦争をより多角的・総合的にとらえることを可能とするものである。このような「低い視点」から戦争を考えることは、戦後 70 年以上が経過して戦争の記憶の風化が叫ばれる中で戦争を正しく語り伝えることを可能とするとともに、現代のメディアやゲームが作り出す一面的で皮相的な戦争のイメージをあらため、戦争に対する人々の想像力をより現実的なものとするうえで重要であると考えられる。 (388 字)